

高
2021

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で15ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

受験番号	
氏	名
	ふりがな

このごろの若い人は本を読まないといって私たちは悲しんだり目を三角にしたりするけれど、よく考えてみると、いまもし亡くなった父が現れて、たとえば今月読んだ本について訊ねられるようなことがあったら、きっと彼はあきれ顔で溜息を吐いて言うだろう。情けないなあ。そんなものしか読んでないのか。お前の読む本はいつも①枝葉みたいなものばかりだ。②もっと大事な本を読め。

女の子だから、本を読ませてもなんにもならない。ながいこと、明治生まれの父はそんなふうに考えていたようだ。男なら自分のしたかったことをさせられるが、女ではどうしようもない。そんな父の態度は、しかし、私たちが成長するにつれて、すこしずつ変っていったようにも思う。

本好きだった総領の私には、ときによって愉しそうに本の話をするようになった。私も父の気に入らなりたい一心で、耳をかたむけた。小学校の六年ぐらいのときだったろうか、冬のある日、風邪で床にいた父に呼ばれた。二階の寝室に行くと、たった一日のことなのに、髭がのびて、私には大病人の顔にみえた父が言った。古川橋の本屋に行って、パパの読みたそうな本を、おまえがえらんで買ってこい。

とっさには信じられなくて、父の枕元にすわっていた母の顔を見ると、彼女は笑っていた。じゃあ、ほんとうなんだ。父に認められたうれしさに、天にも昇る心地のまま、私は家を飛び出すと、書店に走った。そして、一時間、目玉がどうかなくなってしまいそうに棚の本をにらんだあげく、一冊の随筆集を買って帰ったのを、父はよろこんでくれた。子供にしては、ずいぶんませた選択だな、といって。佐藤垢石という人が書いた、『ためき汁』と

いう随筆集だった。

父の母校でもあった大学で勉強するようになってまもないころのこと、私は、関西にいる母たちから別れて、ひとり東京の家にいた。ときどき上京してくる父に、私は、どこか^③母からあずかる気持で対していたのだったが、ある夜おそくなってから、私の寝ていた日本間に父が本をとりに入ってきたことがある。父が大事にしていた鷗外全集と鏡花全集がその部屋の本棚にならんでいたからである。本棚のまえにしゃがみこむような恰好で、私にはかなり長く思えた時間、父は兵児帯へこおびをしめた、かたちのいい背中をこちらにむけて、ページを繰ったり、ちよつと読みふけったりしたあと、探していたものをようやく見つけたのだろう、何冊かをかかえて立ち上がり、廊下に出る障子を開けたところで、まだ机に向っていた私にいきなり声をかけた。

「おい、おまえ、鷗外は読んだか」

はい、と答えたか、どうにかして父を凌しのごうとなにかにつけてつっぱっていた当時のことだから、まあね、ぐらいの生意気な返事をしたのかもしれない。私の返事なんかどうでもいいという、いつもの調子で、父はおおいかぶさるように言った。

「なにを読んだ」

A 学校で読んだり人に聞いて読んだりした『舞姫』あたりの三部作とか、『雁』、『高瀬舟』、そして『山椒大夫』ぐらいを私はあげたのではなかったか。『即興詩人』の文章はいつか自分も翻訳を仕事にすることができればと思っていたから、繰り返し、噛みしめていた。これだけ読みましたといえば、いくらなんでも及第だろうと^④たかをくくっていると、父は、そうか、とうなずいただけで、部屋を出ていこうとして、後ろ手に障子を閉めながら言った。

「鷗外は史伝を読まなかったら、なんにもならない。外国語を勉強しているのはわかるが、それならなおさらの

ことだ。『澀江抽斎』ぐらいいは読んどけ」

父の蔵書では子供のときから漱石全集が夙川しゆがわの家の私たち姉妹の寝ていた部屋の本箱にらんでいて、私はその中の一冊に『それから』と『門』が入っているのを、ながいこと『それから門』という小説があると信じこんでいて叔父たちに笑われたりしたくらいだったから、漱石には、なんとなく面識のあるような印象をもっていたが、^⑤鷗外が重々しい足取りで私の読書プログラムに割り込んできたのは、このときがはじめてだった。いくら本好きとはいっても、現代文学全集を片端から読むぐらいが関の山だったから、史伝を読めと父にいわれたときは、すぐにはそれが鷗外のどんな作品をさすのか、とつきには見当がつかなかったし、ひさしぶりに^⑥父に全面降伏した感じだったが、ほんとうに読んでいないのだから、なんとも仕方ない。しかも、そのあと『澀江抽斎』を全集で読んでみて、ますます父にあたまが上らない気持だった。

だいいち、それまで私が小説と考えていたものとあまりにもかけ離れていて、こういうのがおもしろいといえるのかどうか、まず見当がつかない。漢字ばかりの字面がざらざらと目のまえを流れていくだけで、どうすれば中に入り込めるのかもわからず、入口のない建物のまえに佇たずんでいるような心細さだった。五百いほという女性の骨太な描き方につよい感銘をうけたのは、二度目に読んだときだったように思う。こういう知的な女性は、それまでの日本の文学には出てこなかった。漱石のいわゆるインテリ女たちは、うわついていて私は好きになれなかったが、五百にはかなわない、と思った。そういう人物を、遊女ばかり出てくる江戸文学の時代にくみこんでくれた鷗外に、私は感謝する気持だった。

それからしばらくのあいだ、私にとつての『澀江抽斎』は、五百が宝石のように光っている作品としてだけ、あたまに残った。近年、アメリカで『澀江抽斎』から五百が出てくる部分だけを、^⑦サワリの抜粋のようなかた

ちで訳出されて私は不満だったが、なるほど、自分とおなじような読み方をした人がいるな、とも思った。五百は、あの煩雑な澀江家のしがらみのなかに組み入れられたとき、いつそうの光彩を放つのだ。

大学院の一年だけ終えて、フランスに、またつづいてイタリアに留学した私のところに父が送ってくれた最初の小包が岩波文庫の『即興詩人』だったことは、いつかも書いたことがあるが、その小包にすこし後れて、この小説に出てくる場所をひまを見つけて訪ねなさい、というような手紙が着いた。将来、翻訳がしたいのなら、『即興詩人』をお手本にしろ、と私にとってはいまさらのようなことも書いてあって、^⑧へきえきした私はまたまた生意気を發揮して、『即興詩人』は意識、誤訳だらけだそうです、などと返事を書いたこともある。四年後に結婚してイタリア人の夫といっしょに帰国したとき、父がまつさきに話題にしたのは、『即興詩人』のローマの幼年時代に出てくる、ヴェネト通りの「骸骨寺」だったり、公現祭に主人公が詩を暗誦する、丘の上の教会「アラ・チエリ」についてだった。自分が外遊したときの記憶をたどりながら、ヴィア・ヴェネトは、坂になった街路樹のある広いきれいな通りだったろう、たくさんカフェがあった、などと言って、私たちをおどろかせ、父は得意がった。

いずれにせよ、^⑨鷗外が父の生涯を通して私の上にのしかかっていたのは事実で、父のナマの言いつけにはことごとくに反抗しながら、ふしぎに鷗外については、ぜったいになわなないと信じていたし、父の忠告は、日本文学の分野ではとくに師といえる人をもつことがなかった私にとって、ほとんど金科玉条だった。

その後、『即興詩人』はだんだんと私の興味の中心からはずれていったが、作品としての『澀江抽斎』をはじめとする一連の史伝は、あのときの父の捨てぜりふのような言葉といっしょに、私のなかでくすぶりつづけた。あんなふうに父が言ったからには、なにか根拠があるにちがいない。そうも考えたし、父だけでなくて、

B

自分がこの人と思って尊敬した作家である石川淳や永井荷風が鷗外の偉大さを繰り返して語っているかぎり、その価値が理解できないのであれば、それは当方の無知無学ゆえに決まっていたから、あせった。ながいこと、解るような気がしたりまた解らなくなったりのあいだを私は往き来し、もちろん鷗外だけに没頭していたわけではなけれど、ときには鷗外にはまったく語りの才能が欠けていたのではないかと判断してこの面倒な作品群から逃げようとしたこともあるほど、私にとっては厄介な作者でありつづけた。

その後も、私のほうは森鷗外にいたり離れたりで、時間が過ぎたが、父は鷗外の史伝から興味をつなげて、^⑩江戸の大名や旗本の素性や系譜、知行高などが記された武鑑というのを神田で漁っては買いあつめるようになった。一九六七年に夫が死んですぐあと、母が病気で危篤になり私がイタリヤを離れて帰国していた時期に、父は毎晩、母のいない二階の座敷で、暗いスタンドをつけておそくまでそれらの武鑑に読みふけていた。その年のはじめに父は胃癌の手術を受けていて、病名を知らされてはいなかったが、父親をおなじ病気で失っていた彼には、もしかすると自分もという気持はあつたはずで、その父が溺れるように古文書を読んでいる姿には胸をつかれるものがあつた。商人の家庭、それも一代で身代を築いた両親に育てられた父にとって、武士たちの世界は、自分たちの知らなかった虚構の秩序として、精神のよりどころにしようとしたのではなかったか。

江戸時代の文化にかかわっていた人たちの知的生活がどういうものであつたか、その背後にはどうかたちの交友があつたか、というようなことを、それにふさわしい文体で練りあげた作品が鷗外の史伝だ、というふうな石川淳はたしか書いていて、それが私の読んだ史伝論でもっとも納得のいくものだったが、それでもまだ、なにかもつとありそうだという気がしきりにした。そのあたりのことにすこし光が射したのは、じかに史伝を読んだことではなく、ごく最近、『阿部一族』を読んでだった。明治天皇の死に殉じた乃木大将の最期に感銘をうけて書いたという『興津弥五右衛門の遺書』にはじまる、いわゆる歴史小説群を境に、鷗外が題材を西洋の思

想あるいは事物にもとめることをしなくなり、日本の過去に置くようになったのは、彼が日本の現状に愛想をつかしたからだという論旨をよく目にするが、読んでいて、『阿部一族』の底流にある、西洋臭さのようなものに私はふと気づいたのである。『阿部一族』は殉死―切腹という武士たちの慣習が、西洋人をふくむ部外者が考えられるように、C 野蛮な風習なのではなくて、確固とした哲学や美学に支えられていたという一面を明らかにしている。しかし、最後にこの一族が苛酷な滅亡に追いつめられていく過程を、共同体の論理に従わざるを得なかった社会への批判と読むことは可能だけれど、それと同時に、ギリシア悲劇的な運命の桎梏しごくとしても読めるのではないかと考えが浮かんだとき、鷗外の晩年の作品への解説の扉がすこし開けたように思えた。人間の不条理ということが、ここでひとつの中心的な命題として克明にたどられていることは確実で、その捉え方は日本／東洋的というよりはより西洋的と思える。西洋的といえは、たとえば主君の犬をあずかっていた下男がその犬までを殉死させる場面などでは、文体の格を一段下げて大衆文学ふうにしらえている点などからも、博覧強記の見た本のような鷗外がギリシア以来の文章の格の高低をあてはめているように、私には読める。ようするに、鷗外は西洋の技法を骨格にすえて、日本的な題材をあつかい、それを、たとえば諸処しよこに置かれた季節の推移への言及のように日本古来のレトリックで飾りながら、重く漢文に依存した文体を練りあげるといふ、比類ない統合を意識した作業がここには見られる。この方向から『抽斎』以下の史伝を読めば、きつと明かりが見えるのではないかと私は思いついた。

『澀江抽斎』について、私がつまんだ意見のひとつも言えないうちに父は死んでしまったが、私は、近頃になって、やっと^①史伝への私なりの入口が見つかったような気になっている。

(須賀敦子『遠い朝の本たち』より)

問一 傍線部①について答えなさい。

A 言葉の意味として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 主要ではないこと
- イ 極めて細かいこと
- ウ 見つけにくいこと
- エ 本物でないこと

B ここから想像される四字熟語を漢字で答えなさい。

問二 傍線部②とあるが、全文を通して父にとっての「もっと大事な本」とは何か、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 漱石の三部作
- イ 江戸時代発行の武鑑
- ウ 鷗外の史伝
- エ アンデルセンの翻訳

問三 傍線部③とは筆者のどんな気持ちの表れか、最も近いものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 慣れない土地で父が不自由しないように説明したいということ。
- イ 母からこのために手渡された資金内でやりくりしたいと考えていること。
- ウ 移動の手段などで困らないように道案内をしてあげたいということ。
- エ 食事のことなど母にひげをとらないような世話をしなければならないこと。

問四 空欄A、B、Cに入る最もふさわしい語句は次のどれか、記号で答えなさい。

- ア もちろん
- イ なぜなら
- ウ たとえば
- エ しかし
- オ ただ
- カ たぶん

問五 傍線部④と⑧の文中での意味として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

④ たかをくくる

ア 偉そうな態度をとる イ 大したことはないと見くびる ウ 信じて疑わない

エ 大事だから慎重に扱う

⑧ へきえきする

ア うんざりして嫌になる イ うっかりして失敗する ウ 感動して大切にする

エ あきれて投げやりになる

問六 傍線部⑤とはどういうことを意味しているか、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 今まであまり触れていなかった鷗外をきちんと読まなければならないということ。

イ 漱石と鷗外の違いについてきちんと理解しなければならぬということ。

ウ 漱石を読み終えた今になって鷗外を読むのはとてもつらいということ。

エ 今まで本など読まなかった自分をこの年になって反省するように言われたということ。

問七 傍線部⑥とあるが、筆者がそう思ったのはなぜか、文中の言葉を使ってその理由を三十字程度（句読点を

含む）で答えなさい。

問八 傍線部⑦で「不満だった」理由は何か、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 漱石の描くインテリの女性が五百に比べて生き生きとしていたのに、適切に訳出されていなかったから。

イ 五百という女性が知的な女性であり大変美しい女性だったのに、適切に訳出されていなかったから。

ウ 漱石の描く五百には今までの文学には描かれなかった魅力があるのに、適切に訳出されていなかったから。

エ 五百という女性は知的であり作品の中での存在感が際立っていたのに、適切に訳出されていなかったから。

問九 傍線部⑨とはどういうことか。筆者にとっての鷗外の存在を説明する言葉を文中から五字で抜き出しなさい。

問十 傍線部⑩のような行動を父がとるようになった理由を筆者はどう推測していますか、本文中から一文で抜き出し、その最初の五字を書きなさい（句読点は含まない）。

問十一 傍線部⑪にあたるものを本文中から一文で抜き出し、その最初の五字を書きなさい（句読点は含まない）。

問十二 次の選択肢から漱石と鷗外の作品をそれぞれ二つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 友情 イ こころ ウ 青年 エ 破戒 オ トロッコ カ 坊っちゃん

キ 清兵衛と瓢箪 ク 最後の一句

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

この作品に登場する人物は、院、院の近習、雅房大納言（雅房卿）、筆者である。また書かれた時代は、鷹狩（鷹を放って小動物を捕えさせる狩猟のこと）が、殺生の観点から好まれていなかった。

雅房大納言は、^①才賢く、よき人にて、大将にもなさばやとおぼしける比、^②院の近習なる人、「ただ今、あさましき事を見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と^③問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹に飼はんとて、生きたる犬の足を斬り侍りつるを、*中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、うとましく、憎くおぼしめして、^④日來の御気色もたがひ、昇進もし給はざりけり。

さばかりの人、鷹を持たれたりけるは、^⑤思はずなれど、犬の足は、^⑥あとなき事なり。虚言は不便なれども、^⑦かかる事を聞かせ給ひて、憎ませ給ひける君の御心は、^⑧いと尊き事なり。

（『徒然草』第一二八段より）

*院の近習・・・天皇を退いた上皇を院と呼ぶ。近習は側に仕える人のこと。

*鷹に飼はん・・・鷹狩用の鷹にえさをやること。

*中垣・・・隣の家との間にある垣根

*思はずなれど・・・意外であつたけれど

問一 傍線部①「才」とは何か、この場合の「才」を表す意味として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 手際 イ 優雅 ウ 学識 エ 容貌

問二 傍線部②「あさましき事」とあるが、口語訳として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 驚きあされる事 イ 思いがけない事 ウ 悲しい事 エ 恐ろしい事

問三 傍線部③「問はせ給ひけるに」の主語は誰か。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 院 イ 院の近習 ウ 雅房大納言 エ 筆者

問四 傍線部④「侍り」の読み方を現代仮名遣いで答えなさい。

問五 傍線部⑤「日来の御気色もたがひ」の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア その日以降、雅房大納言の体調が悪くなってしまう
イ 院のそれまでの雅房大納言を認める気持ちは変わってしまい
ウ それまでよろしかった院のご機嫌も普通ではなくなってしまう
エ 雅房大納言の日々の習慣も大きく様変わりしてしまい

問六 傍線部⑥「あとなき事なり」の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 近習が嘘をついたという許されない事である。

イ 近習がふざけてついた嘘だといってもむごらたしい事である。

ウ 雅房大納言の嘘があきらかになったという事である。

エ 雅房大納言がただ嘘をつかれたという根拠のない事である。

問七 傍線部⑦「かかる事」の内容は何か、本文中から十五字以内で探し、最初と最後の二字を答えなさい。(句

読点は含まない)

問八 傍線部⑧「いと尊き事なり。」と書いた筆者の思いとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えな

さい。

ア 動物を殺すことに嫌悪感を持つ院は、伝統を重視する為政者であるということ。

イ 動物を競わせる野蛮なふるまいは、院から厳しく制限してほしいということ。

ウ 動物を慈しむ院の反応は、たいそう素晴らしいと感じられるものであったということ。

エ 動物を優しく保護する対応を、院に率先して行ってほしいということ。

問九 本文を読み、生徒四名が感想を述べあっている。慣用句の意味もふまえて明らかに間違っている生徒を答えなさい。

生徒A 雅房大納言が可哀そうだね。一方的に嘘をつかれて、雅房大納言にとっては「青天のへきれき」だったろうな。

生徒B 雅房大納言はすぐれた力があつたからこそ、周りの人から嫉妬されていたのかな。「出る杭は打たれる」ということだろうか。

生徒C 嘘の内容も残酷で、聞けば怒りを覚える内容だった。でも、嘘かどうか確かめることが必要だったね。「嘘も方便」ともいうけれど、悪意が感じられるなあ。

生徒D でもこの作品を読むと、作者は嘘に怒っているというよりは、嘘を信じた院についてほめているね。院は、「高見の見物」だったね。

問十 この物語は「徒然草」に収められている。①作者はだれか。②書かれた時代はいつか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ① ア 兼好法師 イ 鴨長明 ウ 清少納言 エ 本居宣長
② ア 平安時代 イ 鎌倉時代 ウ 室町時代 エ 江戸時代

③ 次の問いに答えなさい。

① 次の四字熟語の意味として最もふさわしいもの次から選び、記号で答えなさい。

有名無実

ア 世間の評価が高くないこと。

イ 反対意見を認めないこと。

ウ 適当な時期ではないこと。

エ 実質を伴わないこと。

② 次の慣用句に共通して当てはまる語を漢字で答えなさい。

□を落とす □を並べる □を持つ

③ 次の熟語の構成と同じものを記号で答えなさい。

瞬間

ア 歓声 イ 作文 ウ 送迎 エ 削減 オ 提案

四 次の傍線部の読み仮名を答えなさい。

- ① 作品の類似性を研究する。
- ② 委託業者を装った電話に気をつけましょう。
- ③ 中学生最後の大会に惜敗する。
- ④ 首位の奪還は目前だ。
- ⑤ ターナーの難破船の油彩画を鑑賞した。

五 次のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

- ① シオドキを見て立ち去った。
- ② 新しいセンプウキを購入する。
- ③ 道路ヒョウシキを確認することは大切だ。
- ④ タヅナを引き締めて試合に臨もう。
- ⑤ 母はお菓子作りにコツています。

